

2024 年度 個人研究実績・成果報告書

2025 年 4 月 21 日

所属	サービス創造学部	職名	教授	氏名	西尾 淳
研究課題	芸術と商業文化				
研究キーワード	芸術と商業文化・芸術性、 哲学	当年度計画に対する 達成度	2.順調に研究が進展しており、期待どおりの 成果が達成できた		
関連する SDGs項目	9. 産業と技術革新の基 盤をつくろう	11. 住み続けられるまち づくりを	12. つくる責任 つかう 責任	13. 気候変動に具体的な 対策を	
1. 研究成果の概要					
<p>2024 年度においても、基盤教育機構の講義である「芸術と商業文化」においてサステイナブル社会への論及を深化させていくことに尽力した。つまり、遠藤隆吉先生の治道家の精神を核としサステイナブル社会に生きる学生の教育に注力した。実際、私の目指す千葉商科大学の教育は、自らを主観的精神から客観的精神へ目線を転換する目線を涵養することにある。</p> <p>また、私は芸術について原点に立ち戻り問いを立てた。いうまでもないが、芸術とは先人が人間を躍動させるために進展させてきた知の技法である。芸術は哲学の最高領域であり、それは人間の魂に直接感動として影響を及ぼすものである。そしてその感動という心の揺さぶりこそが人間を人生の最終目的である幸福へと導く。</p> <p>事実、遠藤先生の大局的見地に立つといった言葉を私はこの一年間、学生に伝えてきたが、それは学生が主観的精神を相対化する客観的精神を獲得し、そのうえで大局的見地に到達することに繋がるのである。このような私の教育の現場での対応がまさに 2024 年度においても研究成果となっている。言い換えると、そういった主観的精神から客観的精神への移行が、市場原理からサステイナブル社会へ移行していく時代の変化を捉える治道家の精神への広がり結びつくのである。</p> <p>考えてみれば、遠藤先生が注目したヘラクレイトスの万物流転の視点は、治道家の基盤となり、生成示字を実現するものである。というのも、万物流転は、変化そのものであり、その変化の片鱗はプラスとマイナスといった引力と斥力に現れるのである。それは、二律背反の連関を意味している。そして、この引力と斥力の関係は人間関係だけでなく企業間関係あるいは国家間関係にも通じるものである。</p> <p>つまり、遠藤先生が捉えたヘラクレイトスの変化とは、プラスとマイナスを彩るものである。そのため、自分自身の可能性とは、人生のプラス、マイナスといった、幸不幸に転換するものではなく、自分自身の成長の軌跡として変化を受け取る強さを意味しているのである。</p> <p>それは、人生といった時代の変化をしっかりと認識することであり、だからこそ、変化の意味をしっかりと把握することに繋がるのである。このように考えると、変化をとらえるとは、自己から離れた社会との関係を共有できる主観的精神から客観的精神へ成長していく精神的自立にほかならない。そして、このような客観的精神を備えて初めて SDGs のような社会課題への取り組みが可能となる。というのは、課題解決のためには、他者との合意形成が不可欠だからである。私の講義にはこの課題解決の意味も含意されておりそれが治道家の精神を涵養していく大きな原動力となることは間違いない。</p> <p>最後に、これまで、石井教授との哲学研究は、2024 年度においては 19 回にわたり、その中では、プラトン、ヘーゲルについて論究してきた。その意味で、ヘーゲルの対象を見る目は、主観的精神から客観的精神への認識の成長を必要とする。そのためには、善なる精神を貫く道徳的目線が必要であるとヘーゲルは述べている。その意味で、私はこの講義においても学生一人一人にこのヘーゲルの観点を養わなければならないと思っている。というのも、遠藤先生の治道家の精神も、ヘーゲルに重なる点があるからである。それは、商業文化を整</p>					

えようとした点である。

以上、2024 年度において、私の「芸術と商業文化」の研究と教育はヘーゲル理論の持つ主観的精神から客観的精神、客観的精神から絶対的精神への成長の促しが遠藤先生の治道家の精神と結びつくことを明らかにしたのである。

2. 著書・論文・学会発表等（査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載）

【論文（査読あり）】

2025 年度に、上記の研究概要を論文化する予定である。

【著書・論文（査読なし）】

叢書『SDGs と大学 3』千葉商科大学、2024 年 3 月 担当「安全・安心な都市・地域づくり」

- ・ 2 - 3 自助のスキルと共助のハートを育てる「サバイバルキャンプ in いちかわ」（57~62 ページ）
- ・ 2 - 4 楽しく巡って防災の知識を身に付ける「防災ロゲイン」（63~68 ページ）
- ・ 2 - 5 車を使った防災術を体験的に学ぶ「車（シャ）バイバル」（69~75 ページ）
- ・ 3 - 3 地域交流拠点としての The University DINING（124~150 ページ）

【学会発表等】

特に無し。

3. 主な経費

2024 年度の研究計画書に沿って適切に支出した。

4. その他の特筆すべき事項（表彰、研究資金の受入状況等）

- ・ ぼうさいこくたい 2024 熊本 ポスターセッション出展
 - ・ 楽しい防災教育の説明
 - ・ 国府台コンソーシアム防災の日説明
 - ・ 出展団体との交流
- ・ 地方再生事例研究フィールドワーク 美濃市
 - ・ NIPPONIA 「美濃商家町」
 - ・ WASITA MINO 「まちごとシェアオフィス」
 - ・ 和紙にまみれるワラビーランド
 - ・ 岐阜県立森林文化アカデミー

(本文は2ページ以内にまとめること)